

濱田あや

(チェンバロ奏者)



私は毎朝ランニングをするのが習慣で、ニューヨークではセントラル・パーク、パリではセーヌ川のほとり、と決まったコースを走っています。思うように事が運ばなくて落胆することがあっても、前日の練習がうまくいかなくても、朝日を浴びて大地を駆けていると爽快な気分になり、「今日はこういう風に練習してみよう」「あのフレーズはこう弾いてみたらどうだろう?」と新たなアイディアが浮かんできます。演奏旅行で各地を訪れる時も同様です。初めて訪れる土地、会場、そして何より初めて演奏する楽器との出会いを前に、毎回期待と不安が入り混じりますが、その街の空気や匂いを感じていると、新しい環境での演奏が楽しみになります。

海外で生活している私にとって、9月は新しいスタートの月です。学校の新学年も9月から始まりますし、コンサート・シーズンも秋から始まります。神戸女学院中高部時代は、毎年4月に校庭の桜の木の前でクラス写真を撮り、気持ちを新たにするのが恒例でしたから、日本を離れてから何年間はかなり違和感がありました。しかし今では、夏の間に一年の予定やレッスン・プラン、新たなレパートリーを確認し、日脚が短くなって秋の風を感じる頃になると、新しい生徒や共演者の方々との出会いを前に、自然と気が引き締まる思いをするようになりました。今まで様々な「出会い」があり、こうして演奏家として活動していく大きな力となりました。チェンバロとの出会い、師匠との出会い、支えてくれる友人との出会い、刺激を与えてくれる同僚との出会い・・・。

出発点は、「チェンバロとの出会い」があったチエコのプラハでした。10代後半の頃、「モーツアルト記念館」を訪れた時のことです。その建物は、モーツアルトがプラハ滞在の折に過ごしていた邸宅で、私が訪れた時は博物館としてモーツアルトゆかりの品が展示されていて、チェンバロもその一つでした(現在は財政難で様子が違うようです)。自筆の手紙などの展示品もさることながら、ピアノ専攻であった私は楽器への興味が募って、気が付くとチェンバロの前にかけられているロープをまたいでしまっていました。モーツアルトが暮らした部屋に佇み、使われていた楽器に触れ、「18世

紀では、このような空間はこの楽器の響きで満ちていたのか」と、タイムトラベルの魔法にかかつたような衝撃を受け、すぐさまチェンバロのレッスンに通い始めました。それから後に、生涯の師と仰ぐ方々との出会いがあり、長時間にわたる毎回のレッスンの度に、新しい宝物が増えていくような、新しく生まれ変わったような気持ちになつたものです。

また、昨年は大きな「楽器との出会い」がありました。グスタフ・レオンハルト氏が亡くなるまで所有されていたチェンバロを、デビューCDの録音に使用することになり、幸運な巡り合わせに、一生分の運を使い果たしたかと思ったほどです。「どうして私にこんな大役をくださるのだろう?」と身に余る名誉な出来事に信じ難い気持ちを抱えながらも、録音が始まる3ヵ月前に初めてその楽器を弾いた時の感激—指先の感覚と鍵盤の感触がピッタリと一致し、自分の思い描く響きや音色が素直に表現できることの喜び—は、今でも鮮明な記憶です。将来、一回り大きく成長できた暁には、またこの楽器と対話の時をもち、録音することができたらと、再会の機が待ち遠しい思いです。

夏の思い出を振り返りながらも、これから的一年に思いを馳せる始業の月。新しい聴衆の方との出会い、いつも聴いてくださっている方々との再会、新しく挑戦する作品、新たなレコーディング・プロジェクト・・・。起こり来る出会いを思い、心が弾みます。Cheers!

コンサート情報

リサイタル「涙のパヴァーヌ・情熱のファンダンゴ」

9月18日(金) 19:00 初台:近江楽堂

9月25日(金) 19:00 大阪:大阪倶楽部4階ホール

コンサートガイド参照

濱田あや(はまだあや)

ジュリアード音楽院古楽演奏科修士課程を、第一期生および特待生として最優秀の成績で修了。4月にデビューアルバム『ジャック・デュフリ:クラヴサン曲集』をリリース。『レコード芸術』誌6月号特選盤、英国『Music Web International』7月版月間ベストCDに選出される。プロミュージカ・チェンバー・オーケストラ首席チェンバロ奏者、レザール・フロリサン伴奏要員を務める。ケネス・ワイス、スキップ・センペの各氏に師事。ニューヨーク在住。